



## 喜多尾さんを偲んで

元原研核データセンターOB

五十嵐 信一

[sntigrs31752@palette.plala.or.jp](mailto:sntigrs31752@palette.plala.or.jp)

喜多尾憲助さんが亡くなられたことを知り、所謂昭和1桁生まれの一人として、寂寥の感に堪えない思いである。確か、喜多尾さんは私と同年だったと記憶している。

大学を卒業した年にビキニ環礁での水爆実験が有り、なんとなく慌ただしく、あまり良い気持ちのする年ではなかった。その頃、喜多尾さんが東大の百田研に出入りしていたことを後で知り、百田先生及びシグマ委員会（現 JENDL 委員会）との不思議な関わりを感じたものだ。ただ、喜多尾さんがシグマ委員会に参加したのは、委員会が発足して10年以上後のことであった。喜多尾さんは放射線医学総合研究所（放医研）に入られて、医療に関する放射線の利用などを研究され、当然のことながら、原子核の構造や反応などにも精通された専門家になられていた。

1974年頃だったと思うが、核構造・崩壊データ（NSDD）及び崩壊熱の重要性に関する諸方面からの要請や核構造・崩壊データに関する国際協力の話が出て、シグマ委員会でも色々と検討が行われた。米国などでは早くからこの方面の活動が行われていて、BNLの核データセンター（NNDC）が中心になって Nuclear Data Sheets のようなものが作られていた。また、よく見かけられたのが、壁などに張られた1.5メートル四方もあったろうか、所謂、核図表で、現在シグマ委員会が出している冊子様の物を広げたようなものであった。

ひとくちに核構造・崩壊データと言ってもどのような分野を担当し、どのような国際協力が出来るのか、など、簡単な事ではなかった。シグマ委員会では国内のかなりの数の専門家から意見を聞き、検討が重ねられた。当時、国際的にはIAEAを中心にして、質量数A=118~129の核種についての評価済み核構造データファイル（ENSDF）の改訂作業が日本に割り当てられていたりして、それへの対応も含め、議論が重ねられた。

こうして ENSDF 関連の専門部会が 1977 年に発足した。喜多尾さんはこの専門部会に参加され、田村務さんらと共に評価作業の実行グループのメンバーとして貢献された。特に、核種の励起準位を推定、特定するために、放出される大きなガンマ線の放出割合（放出強度）などの評価検討を行われた。この作業はかなり複雑で、慎重を要するもので、核データニュース（No.22, 23 (1985), No.26 (1986), No.32, 33 (1989), No.40 (1991), No.47, 48 (1994) 等）などで、そのご苦労の様子を述べられていた。

シグマ委員会に対する喜多尾さんの貢献は、ENSDF への協力が第 1 ではあるが、喜多尾さんご自身は放医研に勤務されていたのであるから、当然のことながら、医療に関する原子核の利用などが本務である。どうもこのことを私などはつい忘れて、喜多尾さんに甘えていたようであった。私が原研を定年退職した 1989 年前後であったと思うが、医療に対する放射線の利用、特に、癌に対する放射線治療が各方面で盛んになり、positron emission tomography (PET) などの技術が急速に発展した。放医研でもこれらの新しい技術を取り入れた医療体制が取られた。喜多尾さんが何かの時に、このような話をされ、若し、癌の治療が必要になったら、遠慮なく言ってくれるように、と言われた。この時、私は「はっ」としたのを覚えている。つい、喜多尾さんの本業が医療であったことを忘れ、ENSDF を中心にした核データが本業であるかのような錯覚に陥っていたからである。どうもこの点は申し訳なく、また、百田先生が生前、「シグマの活動は、ボランティアによって支えられていることを忘れないように」と言われていたことを改めて思い返したものであった。

この様な事を思いながら、改めて喜多尾さんと核データとの関わりを見てみると、この核データニュースへの貢献が実に驚くほどに大きいことに気がついた。どこかで中川さんであったか、核データニュース編集の歩みのようなものを書かれていたが、現在のスタイルになったのは 1990 年前後であったかと思う。編集委員会が非常に良く機能し、見事な編集のニュースを見せて下さり、楽しませてもらっている。喜多尾さんは現在のスタイルになった頃から編集委員として参加されていたようで、つい最近まで、相当長年にわたって貢献されていたように思う。多分、喜多尾さんのアイデアなどが随所に潜んでいるはずであろう。

柴田さんから喜多尾さんへの思い出などを書いて欲しいと依頼を受けた時には若かりし頃の喜多尾さんの姿のみが思い出されて、どうしても晩年の喜多尾さんは現れてこなかった。振り返ってみると、最後にお目にかかったのは、もう 20 年以上も前になってしまっている。年月の重みとでも言うのか、喜多尾さんのシグマ委員会への貢献度の積み重ねの貴重さが改めて思い知らされる。喜多尾さん、本当にご苦労様でした。どうぞ、安らかにお休みください。